

50562

教科書文庫

5
810
33-1946
<del>20000</del>
<del>42088</del>

200030  
2980

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

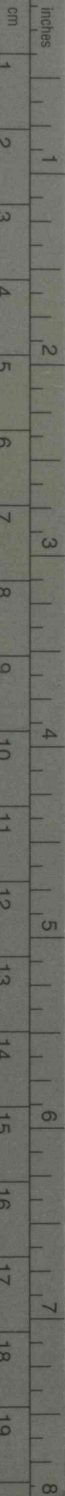


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759  
M014  
資料室

初等科國語 四

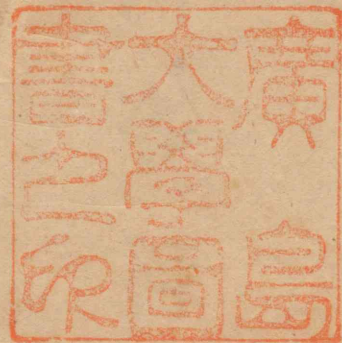
第四學年後期用

文部省



3759  
Mo14

資料室



初等科國語 四

目次

一	稲を育てて……………	一
二	汽車の中……………	六
三	たてごとの一曲……………	十二
四	火をたく楽しみ……………	二十
五	どんぐりと山ねこ……………	二十六
六	貝つか……………	三六
~~~~~		
七	音といふもの……………	四十四
八	一びきのくも……………	四十五

稻を育てて

四月二十七日

今日は、種もみひたしをしました。

品種は、味のよい「農林一號」といふのだからです。やくニデシリットルのもみを、水の中にひたしました。ういたもみがあつたので、手ですくつてみますと、ういたのは、みなもみがらばかりでした。

水をいつばい入れ、ふたをして、日かげにおきました。ときどき、水を取りかへます。種もみを水にひたすと、なはしろにまいてから、早くめが出るのださうです。これは、本に書いてあつたことですが、なぜでせうか

五月二日

水を取りかへる時見ましたら、もみのもとの

方が、少しふくらんできてゐました。

五月六日

今日見ましたら、もみのもとの方から、針のやうに細い、白いめのやうなものが、少し出てゐました。ああ、これが、ほんたうにめになるのかな。

五月七日

今日はお天気がよいので、もみまきをしました。種もみひたしをしてから、ちやうど十日めでした。はんごとに持ち場をきめ、そのさかひにしるしをつけ、土をたひらにして、土ごしらへをしました。土をあまり深くほると、根が下へ伸びすぎて、あとで、なへがとれにくいさうです。水のすむのを待つて、むらのないやうにまきました。ひたさないもみをまいたところは、べつに、しるしをつけておきました。いつ

めが出るでせう。どちらが早く出るでせう。

五月十五日

種もみから、黄みどりのめが一本出ました。  
ひたさない方は、めが一本も出ません。

五月二十一日

もう、なへが二センチから三センチにのびました。ひたさない種もみから、やつとめが一本出ましたが、あとはどうしたのか、まだ出ません。水にひたした方が、一週間早く出ました。本に書いてあつたとほりてした。

六月十三日

なへが、朝風にゆられるやうになりました。  
黄みどりの新しいなへが、だんだん育つていきます。どこの田も、たんざく形に出そろつて、にぎやかです。

六月十五日

七月十二日

どのなへからも、少しづつ新しいなへが、出て来ました。これで、だいちやうぶでせうかしら。

七月十三日

なへのまん中から出た一本の新しいめが、五センチぐらゐになりました。どのなへも、生き生きとしてゐます。根を横へはるので、広いところの方が育ちがよいと思ひました。

七月十八日

葉と葉の間から、新しい葉が、たくさん出て来ました。新しい葉は、まるまつて出て来ます。ずつとひでりがつづいたので、水をやるとうれしさをうでした。

八月七日

みんなて植ゑたなへが、いきほひよく育つて

田植のころになつたので、しろかきをしました。稲が、よく根をはつて育つやうに、小石を拾ひ、土のかたまりをくぐらして、こまかくしました。種まきの時とちがつて、こんどは深くたがやしました。

六月二十七日

いよいよ今日は田植、みんなの顔がうれしさをうでした。とてもよいお天気で、風もなく、あたたかい日でした。なはしろからとつたなへを、みんなで分けました。間を三十センチぐらゐづつあけ、きそく正しく植ゑました。一かぶに三本づつ植ゑたのと、一本づつ植ゑたのと、二通りにして、くきの数のふえるやうすを、見ることにしました。やく十二平方メートルのところ、六十かぶ植ゑられました。これから、水がきれないやうに氣をつけませう。

いきます。五かぶのこして、ほとんど八十五

センチになりました。一本づつ植ゑたなへが、だいたい七本ぐらゐにふえました。三本づつ植ゑたのは、九本ぐらゐですが、一ばん多いので十五本になりました。どちらも、あまりちがはなくなりしました。

八月十八日

稲のほの口がふくらんで、今にも、ほが出さうです。あといく日ぐらゐで、ほが出るでせうか。

八月二十二日

稲のほが出始めました。葉のついてゐるものとところから、黄みどりのほが出ました。田植をした日から、ちやうど六十日めです。

九月一日

ほが出そろひました。ほの一つぶを虫めがね

で見ると、毛のやうなのが、たくさん生えて  
ました。花のさいてゐるほを見つけてました。花  
は、白くてにほひもなく、きれいでありません。

九月四日

朝、花のやうすを見に行きましたら、まださ  
いておませんでした。三時間目のをはりに、開  
き始めました。おひるの時間には、もう閉ぢて  
りました。花のさくのは、一日に少しの間だけ  
だと思ひました。

九月六日

今日は雨降りでした。花は、とうとう一日開  
きませんでした。

九月十四日

稲の花が、散つてしまひました。花の散つた  
あとをさはつてみると、今までべしやんこだつ

十月二十日

どの稲のほも、すつかり黄色になつて、おじ  
ぎをしてゐます。一かぶのくきの數をかぞへて  
みますと、大きなかぶで三十本もありました。  
こんどは、一かぶのほの數を、みんなでしらべ  
ました。一本づつ植ゑたかぶには、ほが十ぐら  
ゐつてゐました。三本づつ植ゑたかぶには、  
一ばん多いので十六、ほかのはだいたい十二ぐ  
らゐりました。兩方をくらべてみて、そんなにち  
がはないことがわかりました。

もみの數もしらべてみました。一つのほに、  
多いのは、百八十ぐらゐるづついてゐました。  
ですから、一つぶの種もみから、やく千五百つ  
ぶのもみができたわけです。

十月二十四日

稲かりをしました。稲を、根もとからかりと

たさきが、ふくれて、固くなつてゐました。二  
つにわつてみましたら、中に青いものが、まる  
くふくらんでゐました。これが、きつと實にな  
るのでせう。

九月二十一日

稲の害虫——いなごが、五六びきゐりました。  
葉のうらに、青黒いたまごが、生みつけられて  
ゐました。先生におきしますと、うんかのた  
まごださうです。みんなで虫取りをしました。  
稲は、だんだん黄色くなつていきます。

九月二十九日

病氣でせいなのびない稲が、五かぶありまし  
た。くきをしらべてみると、中はからつぽでし  
た。虫がたべてしまつたのでせう。先生におき  
きましたら、いもち病といふ病氣にかかつたのだ  
とおつしやいました。

りました。ぢやうぶに作つた稲かけに、日がよ  
くとほるやうに、きちんとかけました。

十一月十日

稲こきをしました。稲こきかいは使はずに、  
手で稲こきをした人もゐました。ほうの間に稲  
をはさんでこいだら、よくとれました。次に、  
もみとごみを分けました。風の來る場所で、目  
の高さぐらゐるところから、ごみをふきとばさ  
せました。もみを、むしろの上にひろげてほし  
ました。

十一月十五日

天氣のよい日に二日ほどほすと、もみがよく  
かわきました。今日はもみすりをしました。き  
かいがないので工夫しました。板と板の間にも  
みを入れ、ごりごりこすつて、もみがらをはが  
しました。きれいなお米がでて來ました。

十一月十九日

のこつてゐたもみを、一日中日光にかんかんほして、すぐにもみすりをしてみました。どんなすつていつたら、こんどはすぐにはげましたが、くだけたもみが、出て来ました。ほしてすぐに、もみすりをするものではないと思ひました。

やく十二平方メートルの土地から、四リットルのげんまいがとれました。全國の平年作は、一平方メートルに三・八デジリットルとれるのですから、これは、だいたい平年作といふことになります。

## 二 汽車の中

(一)

汽車の中は、人ていつばいでした。一つの車

に、何百人ものお客が、おし合ひへし合ひしてゐました。

「もう中へはいれませんか。」

と、入口に近い人がいひますと、

「そんなに、おしたつてだめですよ。」

と、中の人かどなりかへす。むりにわりこまうとする男の人もあり、足をふまれて、おこつてゐる女の人もありました。

私と弟の三郎は、乗るには乗つたものの、動くことさへできません。入口の戸のところまで、

おとなの間にはさまつて、つぶされさうでした。

私は、三郎の手をしつかりにぎり、三郎は、

私のからだにすがりついてゐました。それでも、汽車がゆれるたびに前後からおされて、三郎は、だんだん頭を私によせ、おしまひには、まるで私と三郎とは、からだ一つになつてしまふか

です。

私は思ひきつて、前の人に、

「をぢさん、お願いです。おさないてください。」

とさげびました。

「私がおすのではないよ。」

と、その人は答へました。

「もう少し、中へ入れてくださいませんか。」

「だめだよ、とてもはいれないね。」

私は、ほんたうに、こまつてしまひました。

「おたがひさます。中へつめませう。」

さつきから、なんべんもいつてゐる人がありました。いつかうに、はいらうとはしないやうです。

「三郎さん、もう少し、がまんしていらつしや

う。」

私は、さういつて、どうぞぶじにつきますや

と、思はれるほどでした。

胸のあたりで、「くるしい。」といふ聲がしました。私も、首さへ動かさなくらゐでした。から、どうしようもありません。私は、ありたけの力を出して、三郎をかばふやうに、両手をつぱりました。しかし、おほぜいの人の力にはかなひません。

「なんだか、息がくるしくなりました。小さな三郎はどんなでせう。家を出る時、おかあさんに、

「だいぢやうぶです。をばさんの家へは、一人で、もう二ども行つたことがあるのですもの。

それに、乗りかへもなし、二時間も乗つてゐれば、つくのですから。」

とうけ合つて、三郎をつれて来たのでした。もし、弟にけがでもさせたら、それこそたいへん

うにと、心の中でのいづつてみました。

「ここに子供がある。これはかはいさうだ。」

頭の上で聲がしました。後のをばさんも、

「どうかして、中へ入れてやれませんかしら。」  
と、心配さうにいひました。

すると、なんだか、まはりが少しゆるくなり、  
からだがらくになつたやうな気がしました。私  
は、三郎の肩に手をかけて、

「三郎さん、だいぢやうぶ。」

ときいてみました。人ごみの、うす暗い中で、  
三郎は元氣にこつと笑つて、私を見あげまし  
た。私はほつとしました。

まはりはいよいよこんで、人と人がもみ合  
つてきました。だれかが、

「頭は東京、足は大阪だ。」

といつたので、みんながわつと笑ひました。

といつたかと思ふと、いきなり三郎をだきあげ、  
となりのをぢさんの目の前へ、つき出しました。  
をぢさんは笑ひながら、三郎を受け取つて、次  
の人にわたしました。それから次から次へ、「よ  
いしょ。」「よしきた。」「それつ。」と、送つてくれま  
した。

はじめ三郎は、足をちぢめて、心配さうに私  
の方を見てゐましたが、三人め、四人めと、高  
いところを、人から人へと、メデシンボールの  
やうに送られて行くうちに、にこにこ顔になり、  
とうとううれしさうに、聲をたてて笑ひました。  
お客は、みんな三郎の方を見ました。さうし  
て、高いところをわたつて行く三郎を、おもし  
ろさうに見送つてゐました。

私は、急いでまん中の方へ、三郎のあとを追  
ひかけました。中の方へはいると、だんだんら

私も、をかしくなつてしまひました。さうして、

ふと上を向くと、私の横の、わかい男の人が、  
ただ一人、笑ひもせず、両方の手でまどわく  
をおしてゐるのでした。私たちのために、せい  
いづばいの力で、すきまをこしらへてゐてくれ  
たのです。私は思はず心から、

「どうもありがとうございました。」

と、頭をさげました。

「さあ、今のうちに、先の方へいらつしやい。」  
後のをばさんがいつてくれましたので、私は、  
人と人との間を、かきわけるやうにして出よう  
としました。しかし、弟の手をひいてゐるので  
すし、いつばいつまつた人の間に行くのですか  
ら、一足進むにも、よういではありません。

すると、そばにゐたせの高い男の人が、

「さあ、リレーにしよう。」

くになりました。車の中は、見ちがへるやうに  
明かるく、私の心もはればれとしました。

三郎は、だれかにゆづつてもらつたと見えて、  
座席の上に立つて、

「ねえさん、こつち。」

と、私を手まねぎしてゐます。

私は、三郎の方へ近よりながら、車中の人た  
ちに、心の中でお禮をいひました。

### (二)

私は、D・D・Tを頭から、首すぢから、せな  
かから、腹まで、ふりまかれて、花粉にまみれ  
たみつばちのやうになつて、汽車で眠つてゐた。  
津輕海峡つがるかいがふをわたつて、東京にかへる途中のこ  
とである。

ふいに、私のまはりで、はく手がおこつた。  
目をさますと、三つばかり向かふの席に、一人

の青年が立つてゐた。

胸に、大きなびかびかしたアコードオンをだいてゐた。青年は、西洋の曲をひき始めた。ワルツ曲である。汽車はかなり早く走つてゐるので、青年のからだはゆれてゐた。けれども、ひく手には少しのくるひもなかつた。

軽やかなせんりつは、朝の光のやうに、車中のすみからすみまで流れた。

どうかすると、このごろの汽車旅行は、おすな、おすなのこんざつて、おたがひが、とげとげしくなり、自分だけがよければといふ、あさましいすがたを見せがちであつた。

今、このワルツ曲を耳にしなごら、私は、心からなぐさめられた。

青年は、つづいて、日本のみんなをひきだした。ごくありふれた曲ではあつたが、旅をし

て来た私には、しみじみと聞かれ、こんなに身近く、こんなに温く感じたことはなかつた。

汽車は、いきなりトンネルにはいつた。

しかし、青年はひく手をやめないて、一心に弾きつづけてゐた。

トンネルを出た時、向かふの席で、一人の人が、

「みなさん。」

と、大きな聲を出した。見ると、しらがの老人であつた。

「みなさん、せんえつですが、ちよつと話をさせてください。」

車中の人たちは、みんな、このしらがの老人の方をふり返つた。

「私は、終戦後、いつも心さびしい旅をしてゐました。けれども、今日は、たのしい旅行を

してをります。どこのどなたかは存じませんが、この明かい、たのしい音楽を聞かせてくださる心持を、ほんたうにありがたく思ひます。はなはだ出すぎたことかもしれませんが、この感謝の氣持をあらはしたいと存じます。みなさんいかがでせう。」

このことばが終るか終らぬうちに、あらしのやうに、はく手が四方におこつた。私の席の横も前も、朝鮮の人たちであつたが、この人々も、一しよに手をたたいた。

そこで、しらがの老人は、自分のかぶつてゐたぼうしを、そばの人の手にわたした。ぼうしは、人の手から人の手にわたり、おかねが、その中にたまつた。私の前にも、ぼうしが来た。私も喜んで、いくらかのおかねを、それに加へた。

ひととほり車中をめぐる、ぼうしは、ふたたびしらがの老人のところにもどつた。老人は、「ごあいさつをさせていただきます。」

といつて、青年の前に進み出た。

「これは、たいへん失禮と思ひますが、車中の人たちの志であります。お受け取り願ひます。」

青年はにっこり笑つた。さうして、車中をずつと見まはした。それから、ゆつくりとしたてうして、かういつた。

「みなさん、ありがたうございます。」

ここで、ちよつとことばをきつた。

「でも、私は、こんな結果にならうとは思つてゐませんでした。また、こんなつもりでひいたのでもありません。ただ、たいくつまぎれに、ひき始めたことなのです。せつかくの御好意ですが、このおかねはいただきかねま



す。

さういつてから、しらがの老人に、ぼうしを返した。それから、二三日のおし問答が、二人の間にとりかはされた。

おしまひに、青年は、大きな聲で、

「では、ありがたくいただきます。何かいいことに使はせてもらひませう。」

といつて、ていねいにおじぎをした。

「お禮に、私のおはこを一曲ひきませう。」

これを聞いて、みんなは、また思はずはく手をした。青年は、アコーデオンを両手でぐつとひろげたかと思ふと、しづかにひき始めた。名高いオペラの序曲であつた。

私は、まだから外をながめた。夕ぐれに近かつた。黄色みがかつた麥ばたけ、縣道らしい白つほい道、そこを自轉車に乗つて來る中學生、

たがやしてゐる父と子、細い雲、きりの花——私は、美しい物語の一節を、ながめてゐるやうに感じた。

なんといふ快い感げきであらう。これは、おそらく、私一人のことではなく、車中の人々も、同じ氣持であつたにちがひない。

曲は終つた。ちやうど汽車もとまつた。青年は坐つて、アコーデオンを黒ぬりのケースにしまつた。

停車した驛は、「花泉」といふ名であつた。驛の名も美しく讀まれた。

### 三 たてごとの一曲

モーツァルト、——今から百五十年ほど前に死んだ、このドイツの名高い音楽家の名まへは、オルガンやピアノの音を、一度でも聞いたこと

のあるものなら、だれ一人、知らないものはなだらうと思ひます。

モーツァルトは、むかしから、多くの偉人おじんや、名士たちが、たいていさうであつたやうに、小さな時から、うき世のあらい波にもまれて、育ちました。父も同じ音楽家で、うではすぐれてゐたのですが、世わたりがまづく、いつも貧乏をしてゐたので、モーツァルトは、まだやつと七つぐらゐのところから、父について、方々の國を、演奏旅行をして歩きました。少年の天才音楽家といふモーツァルトのひやうばんが、父を助けてゐたのでした。しかし、小さなモーツァルトには、はなやかな劇場や、りつばな王さまのごてんや貴族のやしきで、なにかふしぎな鳥か生きもののやうに、みんなにもてはやされるのが、かへつていやな、うるさい氣がしてゐ

ました。でも、その旅行には、ただ一つの楽しみがありました。それは、マリヤといふ姉が、いつもいつしよに行つてくれるからでした。

マリヤは、モーツァルトとは五つちがひの、美しい少女でした。さうして、このきやうだいは、小さな時から、とくべつに仲がよかつたので、二人で、いろいろな町のめづらしいものを見たり、美しい山や、森や、湖のふちを通つたりして、旅行するのが、モーツァルトには、演奏會のひまひまに姉に讀んでもらふ、グリムのおとぎ話の中にでも、住まつてゐるやうな氣がするのでした。

ある時、オーストリアの首府のウィーンで、音楽會を開くことになつて、父は、いつものやうに、モーツァルトと姉のマリヤをつれ、水のゆたかな、青いダニューブ川を、川船でくだつ

て行きました。マリヤは、船の手すりにもたれながら、ふなばたから、白くあわだつて切られていく水を、じつと眺めてゐました。マリヤの着物は、もうずるぶん古くなつて、ところどころすりきれてゐましたが、ばら色のやさしい顔と、青いかがやいた大きな目には、貴族のおひめさまのやうなけだかさがありました。それだけ、また、見すばらしいみなりが、目だつのでした。

小さなモーツァルトは、少しはなれた帆づなの下から、姉のすがたをじつと見やりながら、そばに立つてゐる父に話しかけました。

「おとうさん、こんどの音楽會で、おかねが少しでもとれたら、一ばんに、おねえさんに新しい着物を買つてあげてよ、ねえ。」

マリヤは、そのことを耳にすると、きふに

聞いたのだもの。その時、ぼくも、神さまに、これからお頼みしてあげようと思つたのだ。新しい着物だけぢやなく、首かざりも、寶石も、びかびかしたくつも、どうか、いつしよに、おねえさんにあげてくださいつて。」

「わたし、そんなよくばつたことは、考へないわ。」

「よくばりぢやないよ。おねえさんには、それがいるのだもの。おねえさんほどきれいでない人だつて、首かざりだの寶石だのを、持つてゐるのだから。」

父は、暗い、しづんだ顔をして、子供たちからはなれ、かんぱんをあちこち歩きながら、みんな、かなへてやれたらと思ひました。しかしそれは、今のところ、いくら思つても、かひのないことでした。こんどの音楽會で、まとまつ

ふり向いて、弟のところへとんで行きました。そんなことを子供の口から聞くのが、今の父には、どれほど苦しく、悲しいかが、わかつてゐるからでした。マリヤは、さけぶやうにいひました。

「そんなおねだりをするのぢやないのよ。新しいのが買へるやうになるまで、わたし、この着物でたくさんなのよ。それに、長い間古いのを着てゐると、新しいのを着た時には、なほひきたつて見えるわ。」

しかし、モーツァルトは、大きな、熱心のこもつた目を見はりながら、いひました。

「だつてね、ぼくは、おねえさんが新しい着物をほしがつてゐるのを、知つてゐるのだもの。」

よひの明星にお願ひしてゐるのも、知つてゐるし、夕べのおいりの時にいつてたのも、

たかねが、手にはいるまでは、旅費以外のものは、一銭でも使つてはならないのでした。といふのは、持つて來たたてごとに、税關でうんと税金がかかるし、それをはらつてしまふと、あとには、ほんのおこづかひしか、残らないかんぢやうになるからでした。

船が、みどり色の美しい木々におほはれた山の間をぬつて、しづかに進んで行つてゐるうちに、小さなモーツァルトも、同じことを考へてをりました。さうして、ウィーンで演奏會を開くまでに、どうにかして、マリヤにはれ着を買つてあげる手だてはないものかと、幼い胸のうちで、思案してゐました。故郷で、國民學校にかよつてゐた時、自分をかはいがつてくれた先生が、「ちゑをしほれば、いかなる困難にも、解決の方法がある。」と、よくいひ聞かせてくれま

した。だから、なんとか工夫はないものかと、考へましたが、考へても考へても、よいちゑがうかんできませんでした。かれ自身の着物は、ついこの間のたんじやう日に、をちから祝つてもらつたおくりもので、まだ新しく、りつばでした。それだけに、姉の古ぼけた、みすぼらしい着物が、きのどくてならなかつたし、なほまた、姉が、弟の心をさつし、ほんたうは、自分でもほしくてたまらないのに、そんなふうは、そぶりにも見せないで、ゆくわいさうにこにこしてゐるのが、悲しかつたのでした。

そのうちに、船は、美しい、古い城の下を通りました。夕べのおいのりが、神さまに、聞きとどけられたのでせうか、それとも、よひの明星が、願ひをかなへてくれたのでせうか、どちらにして

も、小さなモーツァルトが、美しい、古い城を見あげて、そんなことを思ひつづけてゐるうちに、ふと、ある考へが、頭の中にひらめいてきました。それは、すばらしい思ひつきのやうに感じられたので、モーツァルトは、思はず聲をあげて笑ひました。もし、このくはだてが、うまくいきさへすれば——もちろん、いくにちがひないと、かれには思はれたのですが——マリヤは、きつと新しい着物が買へるのでした。つまり、それだけよぶんのおかねが、父の手に残ることになるのでした。

そのうちに、船は、だんだんとウィーンのふなつき場に近づき、天に向かつてそびえ立つ寺院の、はひ色のたふが、明かるい秋の日に、きらきらしてゐるのが、はつきり目にはいるほどになりました。小さなモーツァルトは、いよいよ

よ、自分のくはだてを、じつさいにおこなふ時が来たのだと思ふと、胸がどきどきし、ほほがまつかにもえました。しかし、むすこのくはだてを知らない父は、モーツァルトが、それほどからふんしてゐるのは、そんなりつばな、美しい町にいたからだらうとばかり考へてゐました。

「おとうさん、おほひをとつてください。」

小さなモーツァルトは、父が、税關の方へ、たてごとを持つて行かうとした時、いひました。

「ああ、おまへは、このたてごとをみんなに見せて、じまんしたいのだな。」

父は、笑ひながらさう答へました。

小さなモーツァルトは、返事をしませんでした。さうして、父が樂器をおろし、美しい洞と

銀線のやうな絲があらはれるのを、じつと見ま

もつてゐました。そこへ、税關の役人がやつて來ました。姉のマリヤは、税金をいくらとられるだらうか、それが心配で、自分のみすぼらしい身なりなど忘れて、そばに立つてゐました。

「しんこくするものはないかね。」

役人はたづねました。

「たてごとだけです。」

このたつた一つの財産に手をかけながら、父は答へました。

「すばらしい樂器だな。大したものだ。」

かう、役人はいひながら、税金として、かれらのいくらもない持がねの、半分以上にもあたるほどの金額を、申しわたしました。

父は、ひどく心配さうな顔になりました。それでも、小さなモーツァルトは、がっかりしませんでした。彼は、まだ自分のひみつなくはだ

てがきつとうまくいくにちがひないと、信じてゐるのでした。

父は、ポケットに手を入れ、小さなさいふをとり出しました。ちやうど、その時のことです。小さなモーツァルトが、たてごとをひき始めたのでした。役人は、びつくりしてふり向きましたが、そのままじつと聞き入りました。まはりゐる人々も、この小さな音楽家をとりかこみながら、税金のことなどは、すっかり忘れてしまひました。小さなモーツァルトの指は、なにかしんびな力で動かされてゐるかのやうに、糸から糸をかき鳴らし、この古いはと場で、これまで耳にしたこともない、美しいしらべをかなでました。五分、十分と、モーツァルトは、むちゆうで、ひきつづけました。人々は、こんなかれんな少年が、これほどまでみごとにひける

てだ。さあ、もつと、何かひいてくれ。」

小さなモーツァルトは、かすかに笑ひました。けいくわくは、成功しさうになりました。かれの目の前には、新しい着物になつて、一そうきれいに見える姉のすがたがうかびました。そこでかれは、もう一ど楽器に向かひ、前よりもつと美しく、りつぱにひきました。かれの望みと喜びが、音楽のしらべにも、おのづとあらはれたのでした。

人々は、數分間、まるで魔法マジックにかけられたかのやうに、かれのたてごとに、ひきつけられてしまひました。とうとう父が口をきりました。

「もうおそくなりましたから、行かなくてはなりません。私たちは、まだ、これから町へ行つて、宿屋を探さなければならぬのです。」父は、かういつて、役人に税金をわたさうと

ものかと感心しながら、そのまはりに、まるく輪になつて固まつたまま、身動き一つする者もありませんでした。

「あんなとして、あれほどりつぱにひくといふのは、まったくふしぎだ。」

小さなモーツァルトが、たてことから手をはなした時、お客の一人が、やつと、われにかへつたやうにいひました。

「あの子は、たてごとはかなりひくのです。」

父は、とくいらしくほほゑみながら、さう答へました。

「おどろいた、まったくおどろいた。」

役人は、ゆめからさめた人のやうに、うなづきながらいひました。

「今までにも、ずるぶん上手なのを聞いたが、これほど美しいたてごとを聞いたのは、始め

しました。しかし、役人は頭をふつていひました。

「いや、いりません。これほどみんなを楽しませてくれたのですから、あの子どもは、何かお禮を受けていいはずです。このかねはとつておいて、あの子になにか買つておあげなさい。」

さういつた役人の目の中には、深い親切があふれてゐました。

このことばを聞いて、小さなモーツァルトは、とびあがりました。

「おとうさん。」

かれは、目をかがやかしてさげびました。

「おねえさんに、新しい着物を、買つてあげてちやうだい。税金をはらはないでいいのなら、そのおかねで買へるでせう。ほくは、そのた

めに、たてごとをひいたのです。」

役人は、びつくりしてかれを見つめ、さうして、新しい感動でさげびました。

「こんなやさしい子どもは、めつたにあるものではない。」

「まつたくです。」

父は、ひくい、感動のこもつた聲で答へました。

「あれは、ふだんからやさしい子なのです。こども、姉に新しい着物を着せたいのです。」

あのたてごとをひいて、それができるといつて、うれしがつてゐるのです。」

マリヤは、弟のおかげで、とうとう、新しい着物を買つてもらひました。それも、かざりボタンのいつばいついた、まつかな、美しいきぬの着物でした。小さなモーツァルトは、マリヤ

それから、何週間かして、かれらは、やつと故郷の町へかへりました。小さなモーツァルトは、ますます音楽の勉強をつづけ、みなさんの知つてゐるやうな、さまざま美しい曲を作つて、とうとう、世界中でだれ知らぬ者もないほどの、大音楽家になつたのです。子供の時から、あのやさしい、なさけ深い心は、おとなになるにつれて、ますますけだかい品位をそなへ、ただ、天才音楽家といふだけでなく、すぐれたりつばな人格者として、人々にそんけいされました。さうして、なにか新しい作曲を發表したり、音楽會を開いたりするたびに、モーツァルトの名は、あらんかざりのはく手としようさんでつつまれました。しかし、モーツァルトにとつては、どんなはなばなししようさんも、成功も、むかし、ウィーンの古いはと場でひいた

がはじめてその着物を着たのを見ると、喜んでとびまはりました。さうして、廣いウィーンの町に、自分たちきやうだいほど、幸福なものはないやうな氣がしました。

二人は、この町でたびたび音楽會を開き、皇族がたの前でも演奏しました。そのころ、ヨーロッパにときめいてゐたオーストリアの皇后は、モーツァルトきやうだいをたいへんかはいがり、宮中によんで、音楽を聞いたり、いろいろけつこうな物をくださつたりしました。この皇后は、モーツァルトに「小さな魔法使ひ」といふ名まへをつけ、かれが何かひいてゐる間は、ちやうど、あの税關の役人が、うつとりしたやうに、かれの音楽に聞き入り、むづかしい外交や、政治の苦勞を、しばらく忘れたと、いひつたへられてゐます。

たてごとの一曲で、税金をはらはずにすみ、そのおかねで、姉の着物を買つた時のうれしさにくらべれば、なんでもありませんでした。

#### 四 火をたく樂しみ

外國でも、冬のある國ならば、かならず、火つき場が、そなはつてゐるはずですが、それが、日本のいはゆるゐろりと同じやうにできてゐるのは、どのくらゐあるでせう。もし、ちがつてゐるならば、どういふふうにちがふか、私は、をりがあつたら、くはしく知つておきたいと思ひます。映畫などで見る西洋の家には、厚いかべにろをはめこんで、みんなが一方を向いて、腰をかけてゐるやうのが多く、また、まん中に置きろがあつても、それが高く、向かふ人の顔の見えないのがあります。日本の平たい

ろばたは、けむりが家いつばいになるのは困りますが、それでも、並んでゐて、おたがひの顔が残らず見られるのは、つがふのよいことです。その顔が、赤々とたき火にうつるのですから、これでこそ、一家だんらんといふことばが、わりびきなしに通用します。ろちで火をもやしてゐた、大むかしの夜を考へると、これが、一ばんに、その古い形式に近いやうで、あるひは、家の中にゆかをはつて住むやうになつてからのちも、なほ、なんとかして、最初の集まり方を つづけたいものと、苦心した結果が、かういふあろりの形になつたのかとも思はれます。年中、はだかであらしてゐるやうな、熱帯地の土人でも、夜分起きてゐるには、やはり、火をたきました。さうして、火をたけば、かならずこうふんして、いつまでも話をして、眠らないといふ

ことであります。人が、近くに顔を見合はしつづ、つづけてものをいふやうになつた始まりは、たき火のかたはらかもしれせん。話と、ろばたとのいんねんは、深いものがあつたやうです。

そのろばたが、常の日はたらく晝の間は、がらんとしてゐるのであります。男は、田や、はたけや、山、野、海、川などに出てしまひ、子供は、道のついで遊び、女たちも、せどや、のきさきて、それぞれの仕事をしてゐます。それが、たそがれ近くになると、方々からもどつて、この一つの火のまはりに寄つて来て、ことばをかけ合ふのであります。今日は休みといふ日の朝の一とき、または、せつくのぜんのとさきなどにも、みんなそろつてゐるなど、前後左右を見わたして、これが家だと感じない者は、

なかつたらうと思ひます。冬は、家なしには、もつとも悲しい時であります。火をたく家さへあれば、だれでも、身と心とを、休めることができました。

親や、年よりが、子を愛するといふことにも、やはり、一つの刻限こくげんのやうなものがあつたのです。夕方、外の風が、だんだんつめたくなるころから、家の中には、赤い火がもえ始めます。母が、庭において、まだ急がしくたちまはつてゐる間、あぐらのひざの上に子をのせて、小さな手をあたたためてやるのにも、歌がありました。それを、だれから學ぶかといふと、自分が、小さなうちに、何十べんとなく聞かせてもらつたのが、土臺になつてゐるのですから、よつほど古いものといふことができます。信州しんしゅうあたりに、今でも行はれてゐるのは、子供に手を出させて、

指と指との間を、おさへていきながら、かうとなへるのです。

火、火、たもれ。

火はない、ないと、

あの山越えて、

この田へおりて、

このうち、きけば、

このくぼつたみに、少しござる。

または、「ここへ来りや、ちよつくりござる。」などといつて、こそぐつて、笑はせるのであります。この「火、火、たもれ」は、むかし、家で火が得にくかつた時代に、近所へ火種を分けてもらひに行くことばですが、山を越えたり、田におりたりしても、火がない、ないといふなどは、むかし話であります。それに、幼い者が興味をもつので、いつも、口遊びのやうにして、

聞かせてみました。

それから、子供に、五本の指をひろげさせて、その一つ一つをかぞへていくとなへごとは、全國にわたつて、かぞへきれぬほど、たくさん種類があります。その中で、たつた一つだけ、宮城縣みやぎの海岸地方に行はれてゐるものを、例にとると、

へびがしらに、アリアーリヤー、

せい高ぼうじに、醫者ぼうじ、

酒わかしのかん太郎。

このもんくは、説明しないと、ほかの縣の人には、わかりにくいでせう。「へびがしら」といふのは、親指のことで、形が、少しばかり、へびの頭に似てゐます。「アリアーリヤー」といふのは人さし指、人をさす時には、どこの子供でも、たいてい、こんな聲を出すので、また、この指

ますが、その多くのものは、をさなごをじつとさせ、または、小さな手のうらおもてを火にかざして、あたたまつてみさせるやうなものばかりであります。

子供は、かうしてゐるうちに、だんだん、ことばを覚え、また、そのことばのかげにかくれてゐる感じを、さつていきました。

近畿地方きんきのかなり広い區域で、松かさのことばを、チチリ・チッチロ、または、チンチラコ・チンチロリンなどと、よく似た言葉をもつて、よんでゐますのは、はじめは、子供に對して、または、子供とともに、こしらへた名であらうと、私は思つてゐます。松かさは、思ひのほか、火力の強いもので、これを火に入れておくと、外木の葉などの消えたのちに、しばらくいぶつてゐて、だしぬけに、ばつともえるので、かう

をアラアラエンビといふところもあります。「せい高ぼうじ」の中指であることは、よくわかり

ます。私なども、もとは、高々指といつてゐました。「醫者ぼうじ」は、すなはち、くすり指、この指は、ほかには使ふことがすくなく、もとは、まじなひのやうなことによく用ひたので、くすり指といふ名もあつたのを、さらに、醫者どのともいふやうになりました。最後に、小指も、あまりきたないことには使はぬので、ゐなかでは、この指をさしこんで、酒のかんをころみました。それゆゑに、小指を、さう呼んでゐたのですが、その「かん太郎」は、同時にまた、かはいい子供といふことでもあつたので、かれらは、それを聞いて、きげんよく笑つたのであります。かういふ種類の、火のはたのわらべことばは、集めてみれば、まだいくつかあり

いふ名が生まれたやうです。こんなはかないことでも、子供にはなぐさみになるので、さびしい日のくれなどには、これを、わざわざろの火に加へて見せて、指さして、ともどもにはやしてゐた人があつたのかと思ひます。さうでなければ、このやうな變つた音のことばが、生まれた理由が、ちよつと考へられませんか。

石川縣の一部にも、ケツケラマツ、または、ケンケラマツ、見島みしまといふ山口縣の島では、コツケラ、信州の松本へんでは、カッコ、これも、おそらく、チチリと同じやうなおこりと思はれますが、それ以外の名としては、松ふぐりまたは、松ボックリのやうなものばかりしかないのであります。

さうして、子ども用ともいふべきねんれうの名まへは、チッチロ以外にも、まだあるやうに

思ひます。たとへば、三重縣のずつと南の方では、葉のついてゐるたきぎを、バァバ木といひ、火にたくとバァバともえるからだ、説明してゐます。くり、ははそ、くぬぎなどもえやすいかれ葉を、バンバといふところも、中國地方にはあります。

あるひは、たきつけにするやうな細い木の枝に、すすきやささのまじつたものを、ボヤとも、モヤともいふなども、やはり、もえあがるやうすを、あらはしたことがだつたかもしれせん。このことばの行はれる區域は、わりあひに廣く、それからかはつては、さういふ植物の生えてゐる場所を、モヤといひ、たかの羽のみだれて役にたたなくなつたのを、モヤずれといつたり、または、ただ、葉や、枝の多い木を、モヤといつて、それをきつて來て、水の中に立てて、う

あなたは、ごきげんよろしいさうで、けつこうです。

あした、めんだうなさいばんをしますから、おいでください。とびだうぐを持たないで來なさい。

山ねこ 拜

こんなのです。字は、ほんたうにへたで、すみも、がさがさして、指につくくらゐでした。けれども、一郎は、うれしくて、うれしくてたまりませんでした。はがきをそつと學校のかばんにしまつて、うち中とんだり、はねたりしました。

ねどこにもぐつてからも、山ねこのにやあとした顔や、そのめんだうだといふ裁判のやうすなどを考へて、おそくまで眠れませんでした。

けれども、一郎が目をさました時は、もう、

なぎや、えびをとるしかけまでを、モヤといつてゐる地方さへあります。數多い例を集めて、くらべてみると、かれ草でも、すぎの葉でも、なんでも、ただ、火に入れて早くもえるものが、モヤ、または、ボヤなのです。

をかしいことには、東京のまちだけでは、火事のごく小さなのが、ボヤでありました。これなどは、氣のきいた江戸人のものいひ方で、小さくてすんだといふ喜びをあらはすのに、こんなことばをもつてきて、笑はせたのが、はじめだらうと思ひます。

## 五 どんぐりと山ねこ

をかしなはがきが、ある土曜日の夕がた、一郎のうちに來ました。

かねた一郎さま 九月十九日

すつかり明かなくなつてゐました。おもてに出してみると、まはりの山は、みんな、たつた今、できたばかりのやうに、うるはしくもりあがつて、まっ青な空の下に、並んでゐました。一郎は、急いでごはんをたべて、ひとり谷川にそつた小道を、上の方へのぼつて行きました。

すきとほつた風がざあつと吹くと、くりの木は、ばらばらと實を落しました。一郎は、くりの木を見あげて、

「くりの木、くりの木。山ねこが、ここを通らなかつたかい。」

とききました。くりの木は、ちよつとしづかになつて、

「山ねこなら、けさ早く、馬車で東の方へ、とんで行きましたよ。」

と答へました。



「東なら、ぼくの行く方だねえ。をかしいな。とにかく、もつと行つてみよう。くりの木、ありがたう。」

くりの木は、だまつてまた、實をばらばら落しました。

一郎が、少し行きますと、そこは、もうふえふきのたきでした。ふえふきのたきといふのは、まつ白な岩のがけの中ほどに、小さなあながあいてゐて、そこから水が、ふえのやうに鳴つて、とびだし、すぐたきになつて、ぐわうぐわう、谷に落ちてゐるのをいふのでした。

一郎は、たきに向かつて、さげびました。

「おいおい、ふえふき。山ねこが、ここを通らなかつたかい。」

たきが、ピーピー答へました。

「山ねこは、さつき馬車で西の方へ、とんで行

と答へました。

一郎は首をひねりました。

「南なら、あつちの山の中だ。をかしいな。まあ、もう少し行つてみよう。きのこ、ありがたう。」

きのこは、みんな、急がしさうに、どつてこ、どつてこと、あのへんながくたいをつづけました。

一郎は、また、少し行きました。すると、一本のくるみの木のこずゑを、りすがびよんびよんととんでゐました。一郎は、すぐ手まねぎして、

「おい、りす。山ねこが、ここを通らなかつたかい。」

とたづねました。すると、りすは、木の上から、ひたひに手をかざして、一郎を見ながら答へま

きましたよ。」

「をかしいな。西なら、ぼくのうちの方だ。けれども、まあ、もう少し行つてみよう。ふえふき、ありがたう。」

たきは、またもとのやうに、ふえをふきつづけました。

一郎が、また、少し行きますと、一本のぶなの木の下に、たくさんの白いきのこが、どつてこ、どつてこ、どつてこと、へんながくたいをやつてゐました。

一郎は、からだをかがめて、

「おい、きのこ。山ねこが、ここを通らなかつたかい。」

とききました。すると、きのこは、

「山ねこなら、けさ早く、馬車で南の方へとんで行きましたよ。」

した。

「山ねこなら、けさまだ暗いうちに、馬車で、

南の方へ、とんで行きましたよ。」

「南へ行つたなんて、をかしいなあ。けれども、まあ、もう少し行つてみよう。りす、ありがたう。」

りすは、もう、おませんでした。ただ、くるみの一ばん上の枝がゆれ、となりのぶなの葉が、ちらつと光つただけでした。

一郎が、少し行きますと、谷川にそつた道は、もう細くなつて、きえてしまひました。さうして、谷川の南のまつ黒なかやの木の方へ、新しい、小さな道がついてゐました。

一郎は、その道をのぼつて行きました。かやの枝は、まつ黒にかさなりあつて、青空は一きれも見えず、道は、大へん急な坂になりました。

一郎は、顔をまつかにして、あせをほとほと落しながら、その坂をのぼりました。すると、にはかに、ばつと明かるくなつて、目がちくつとしました。そこは、美しいこがね色の草地で、草は風にざわざわ鳴り、まはりは、りつばなオリブ色のかやの木の森で、かこまれてゐました。

その草地のまん中に、せのひくい、をかした形の男が、ひざをまげて、手に革むちを持つて、だまつてこつちを見てゐたのです。

一郎は、びつくりして、たち止まりました。その男は片目でした。さうして、見えない方の目は、白くびくびく動き、足も、ひどく曲つてやぎのやうですし、ことにその足先は、ごはんをもるへらの形だつたのです。一郎は、きみが悪かつたのですが、なるべくおちついてたづね

「さあ、なかなか、ぶんしやうがうまいやうでしたよ。」

といひました。男は喜んで、息をはあはあさせて、耳のあたりまでまつかにして、着物のえりをひろげて、風をからだに入れてながら、

「あの字も、なかなかうまいか。」

とききました。一郎は、思はず笑ひだしながら、返事しました。

「うまいですね。四年生だつて、あのくらゐには、書けないでせう。」

すると、男は、急にまたいやな顔をしました。「四年生といふのは、初等科の四年生だらう。」その聲が、あまり力なく、あはれに聞えましたので、一郎はあわてていひました。

「いいえ、大學の四年生ですよ。」すると、男は、また喜んで、まるで顔中口の

ました。

「あなたは、山ねこを知りませんか。」

すると、その男は、横目で一郎の顔を見て、口を曲げて、にやつと笑つていひました。

「山ねこさまは、今すぐに、ここにもどつておいでになるよ。おまへは一郎さんだな。」

一郎は、ぎよつとして、一足後にさがつて、

「ええ、ぼく一郎です。けれども、どうして、それを知つてゐますか。」

といひました。すると、そのきたいな男は、いよいよにやにやしていひました。

「それなら、はがき見たらう。」

「見ました。それで來たのです。」

「あのぶんしやうは、ずるぶんへただらう。」

と、男は下を向いて、悲しさうにいひました。

一郎は、きのどくになつて、

やうにして、にたにた、にたにた笑つて、さけびました。

「あのはがきは、わしが書いたのだよ。」

一郎は、をかしのをこらへて、

「ぜんたい、あなたはなんですか。」

とたづねますと、男は、急にまじめになつて、

「わしは、山ねこさまの馬車別當だよ。」

といひました。

その時、風がどうと吹いて來て、草はいちめん波だち、別當は、急にていねいなおじぎをしました。

一郎は、をかしいと思つて、ふり返つて見ますと、そこに山ねこが、黄色なちんばおりのやうなものを着て、みどり色の目をまんまるにして、立つてゐました。一郎はやつぱり、山ねこの耳は立つてとがつてゐるなど、思つてゐると、

山ねこは、びよこんとおじぎをしました。

一郎も、ていねいにあいさつしました。

「いや、こんにちは。昨日は、はがきありがたう。」

山ねこは、ひげをびんとひっぱつて、腹をつき出していひました。

「こんにちは。よくいらつしやいました。じつは、一昨日から、めんだうな争ひがおこつて、ちよつと、裁判に困りましたので、あなたのお考へを、うかがひたいと思ひましたのです。まあ、ゆつくりお休みください。ちぎ、どんぐりどもがまゐりませう。どうも、毎年、この裁判で苦しみます。」

山ねこは、ふところから、巻きたばこを出して、自分が一本くはへ、

「いかがですか。」

數といつたら、三百でもきかないやうでした。わあわあ、わあわあ、みんな、何かいつてゐるのです。

「あ、来たな。ありのやうにやつて来る。おい、さあ、早くベルを鳴らせ。今日は、そこが日あたりがいいから、その草をかれ。」

山ねこは、巻きたばこを投げ捨てて、大急ぎで、馬車別當にいひつけました。馬車別當も、たいへんあわてて、腰から大きなかまをとり出して、ざつく、ざつくと、山ねこの前のところの草をかりました。そこへ四方の草の中から、どんぐりどもが、ぎらぎら光つてとび出して、わあわあ、わあわあいひました。

馬車別當が、こんどはずを、ガラン、ガラン、ガラン、ガランとふりました。音は、かやの森に、ガラン、ガラン、ガラン、ガランといひ

と、一郎にもすすめました。一郎はびつくりして、

「いいえ。」

「いひましたら、山ねこは、おうやうに笑つて、ふふん、まだおわかいから。」

といひながら、マッチをしゆつとすつて、わざと顔をしかめて、青いけむりをふうとはきました。山ねこの馬車別當は、氣をつけのしせいで、しやんと立つてゐましたが、いかにも、たばこのほしいのを、むりにこらへてゐるらしく、なみだをぼろぼろこぼしました。

その時、一郎は、足もとで、バチバチしほのはざるやうな音を聞きました。びつくりしてかがんでよく見ますと、草の中に、あつちにも、こつちにも、こがね色のまるいものが、びかびか光つてゐるのでした。よく見ると、それは、みんな、赤いズボンをはいたどんぐりで、その

びき、こがねのどんぐりどもは、少しづつしづかになりました。見ると山ねこは、もういつか、黒い、長いしゆすの服を着て、もつたいらしく、どんぐりどもの前に坐つてゐました。別當は、こんどは、革むちを二三べん、ヒュウ、バチッ、ヒュウ、バチッと鳴らしました。

空が青くすみわたり、どんぐりは、びかびかしてじつにきれいでした。

「裁判も、もう今日で三日めだぞ。いかげんに伸をほりしたら、どうだ。」

山ねこが、少し心配さうに、それでも、むりにいばつていひますと、どんぐりどもは、口々にさけびました。

「いいえ、だめです、なんといつたつて、頭のとがつてゐるのが、一ばんえらいのです。さうして、私が一ばんとがつてゐます。」

「いいえ、ちがひます。まるいのがえらいのです。一ばんまるいのは私です。」

「大きなことだよ。大きなのが、一ばんえらいのだよ。私が一ばん大きいから、私が一ばんえらいのだよ。」

「いや、ちがふよ。私の方がよほど大きいときのおふ、判事さんがおつしやつたちやないか。」

「だめだい、そんなこと。せの高いのだよ。せの高いことなのだよ。」

「おし合ひの強い者だよ。おし合ひしてきめるのだよ。」

もう、みんな、がやがや、がやがやいつて、何がなんだか、まるでちのすをついたやうで、わけがわからなくなりました。そこで、山ねこがさげびました。

なくなりました。山ねこがさげびました。

「だまれ、やかましい。ここをなんとかころえる。しづまれ、しづまれ。」

別當が、むちをヒュウ、パチッと鳴らしました。山ねこが、ひげをびんとひねつていひました。

「裁判も、もう今日で三日めだぞ。いかげんに仲なほりしたらどうだ。」

「いえ、いえ、だめです。頭のとがつたのが……」

「がやがや、がやがや……」

山ねこがさげびました。

「やかましい。ここをなんとかころえる。しづまれ、しづまれ。」

別當が、むちをヒュウ、パチッと鳴らし、どんぐりは、みんなしづまりました。山ねこが、一郎にそつといひました。

「やかましい。ここをなんとかころえる。しづまれ、しづまれ。」

別當が、むちをヒュウ、パチッと鳴らしましたので、どんぐりどもは、やつとしづまりました。山ねこは、びんとひげをひねつて、いひました。

「裁判も、もう今日で三日めだぞ。いかげんに仲なほりしたらどうだ。」

するとまた、どんぐりどもが、口々にいひました。

「いえいえ、だめです。なんといつたつて、頭のとがつてゐるのが、一ばんえらいのです。」

「いいえ、ちがひます。まるいのが、えらいのです。」

「ちがふよ。大きなことだよ。」

「このとほりです。どうしたらいいでせう。」

一郎は、笑つて答へました。

「そんなら、かういひわたしたらいいでせう。この中で、一ばんばかで、めちやくちやで、まるでなつてないやうなのが、えらいとね。」

山ねこは、なるほどといふふうになづいて、それから、いかにも氣どつて、しゆすの着物のえりを開いて、黄色のぢんばおりをちよつと出して、どんぐりどもに申しわたしました。

「よろしい。しづかにしろ。申しわたしたこの中で、一ばんばかで、めちやくちやで、てんでなつてゐなくて、頭につぶれたやうなやつが、一ばんえらいのだ。」

どんぐりどもは、しいんとしてしまひました。それはそれは、しいんとして固まつてしまひました。

そこで、山ねこは、黒いしゆすの服をぬいで、ひたひのあせをぬぐひながら、一郎の手をとりました。別當も大よろこびで、五六、べんむちを、ヒュウ、バチッ、ヒュウ、バチッ、ヒュウ、バチッと鳴らしました。山ねこがいひました。

「どうも、ありがたうございました。これほどのひどい裁判を、まるで一分半で、かたづけてくださいました。どうか、これから、わたしの裁判所の名譽判事になつてください。これからも、はがきがいつたら、どうか来てくださいませんか、そのたびにお禮はいたします。」

一郎が、

「承知しました。お禮なんがいりませんよ。」

「いいえ、お禮はどうかとつてください。わたしのじんかくにかかはりますから。さうしてねつたまま、下を向いてゐましたが、やつとあきらめていひました。」

「それでは、もんくは、今までのとほりにしませう。そこで、今日のお禮ですが、あなたは、こがねのどんぐり二リットルと、しほざけの頭と、どちらがおすきですか。」

「こがねのどんぐりがすきです。」

山ねこは、さけの頭でなくて、まあよかつたといふやうに、口早に馬車別當にいひました。「どんぐりを二リットル、早くもつてこい。二リットルにたりなかつたら、めつきのどんぐりもまげてこい。早く。」

別當は、さつきのどんぐりを、ますに入れてはかつて、さけびました。

「ちやうど、二リットルあります。」

山ねこのちんばおりが、風にばたばた鳴りま

これからは、はがきに、かねた一郎どのと書いて、こちらを裁判所としますが、ようございませうか。」

「ええ、かまひません。」

「いひますと、山ねこは、まだ何かいひたさうに、しばらくひげをひねつて、目をぱちぱちさせてゐましたが、とうとう決心したらしく、いひだしました。」

「それから、はがきのもんくですが、これからは、用事これありにつき、明日出頭すべし、と書いてどうでせう。」

一郎は笑つていひました。

「さあ、なんだかへんですね。そいつだけは、やめた方がいいでせう。」

山ねこは、どうもいひやうがまづかつた、いかにも残念だといふふうに、しばらくひげをひきました。そこで、山ねこは、大きくのびあがつて、目をつぶつて、半分あくびをしながら、いひました。

「よし、早く馬車のしたくをしろ。」

白い、大きなきのこでこしらへた馬車が、ひつぱり出されました。さうして、なんだか、ねずみ色のをかしな形の馬がついてゐます。

「さあ、おうちへお送りいたしませう。」

山ねこがいひました。二人は馬車にのり、別當は、どんぐりのますを、馬車の中に入れてました。

ヒュウ、バチッ。

馬車は、草地をはなれました。木や、やぶが、けむりのやうに、ぐらぐらゆれました。一郎は、こがねのどんぐりを見、山ねこは、とぼけた顔つきで、遠くを見てゐました。

馬車が進むにしたがつて、どんぐりは、だんだん光がうすくなつて、まもなく馬車が止まつた時は、あたりまへの茶色のどんぐりに變つてゐました。さうして、山ねこの黄色なぢんばおりも、別當も、きのこの馬車も、一どに見えなくなつて、一郎は、自分のうちの前に、どんぐりを入れたますを持つて、立つてゐました。それからあと、山ねこ拜といふはがきは、もう來ませんでした。やつぱり、「出頭すべし。」と書いてもいいといへばよかつたと、一郎はときどき思ふのです。

## 六 貝 づ か

きのふは、遠足でした。みんなて、學校から四キロほどある貝づかへ行きました。

先生が、町角まで行つて、待つてゐるやうに

まだ春にはならなかつたが、かはいいねこやなぎのつぼみが、ところどころに見えました。

たひらなはたけや、たんぼの向かふに、一だん高いところが見えます。

「むかし、このへんは、波のおだやかな海の内りえだつたのです。そら、あの向かふの小高いところに、白いものがちらちらと見えるでせう。あれが貝づかです。」

もう少して、貝づかにつくといふところで、先生は、一けんの農家にたち寄せられました。しばらくして、その主人といつしよに、出ておいでになりました。

「今日は、このかたのはたけを、少しほらせてもらひます。」

主人も、くわや、ふごや、かごなどを持つて

とおつしやつたので、めいめい、シャヴェルや、移植ごてなどを持つて、角のむきみ屋のところへ集まつてゐました。

おかみさんが、店の人と二人で、せつせと貝をこじあけて、むきみをつくつてゐました。見るまに、貝がらの山が家の前にできます。

先生が、一りん車に箱や、かごなどをのせておいでになり、そこで、てんこがありました。

「ぜんぶそろつてゐるね。ごらんさい。今でも、かうやつて、人は貝をたべますね。むかし……といつてもおほむかしのことだか、貝ばかりを、おもにたべてゐた時があつたのですね。その貝がらを捨てたところが、今日、

これから行く貝づかですよ。」

先生のあとから、五十人の仲間が、おくれないやうに行きました。

來て、かしてくれました。

貝づかにつくと、先生は、ステッキを深く土の中へお立てになりました。土は、やはらかで、ずぶずぶと、ステッキがたけいづばいにささります。

「底までは、たつぶり一メートルはありますね。」と、主人に話してゐられます。

「ここは、この間から、よく話してある貝づかです。この白く上から見えてゐるのは、むかしのしほ水の中にあつた、いろいろな貝のからです。」

むかしの人は、貝がらといつしよに、いらなくなつたりこはれたりした道具や、たべたけものの骨や、角などを、ここへ捨てました。

また、死んだ人をうづめたりもしました。それでここをほると、さういふものが、たくさ

ん見つかることがあるのです。ひとつ、これからほつてみることにさせよう。」

私たちは、もう、ほつてみたくて、うづうづしてゐました。

「まあ、ちよつとおちついて、ゆつくり仕事にかかりませう。まづ、どんなふうにほりますか。」

「ありさうなところをほつてみます。」

「ありさうなところつて、どんなところでせう。」

「……………」

「それはちよつとわかりませんね。もし、手あたりしだいにやつたとする、ぐあひよく何かにほりあてたらいが、ただ、あつちこつちほつてみて、なんにもぶちあたらないと、だめだと思つて、やめてしまふのがふつうです。」

「はい、先生、ほくは、どこか一つところをき

めて、かなり廣く、深くほつていくのがいいと思ひます。」

「さうだ。それがよささうだね。それでは、まづ、東西に一メートルぐらゐのはばで、四五メートル、ほつてみることにしよう。」

先生は、すぐになはですちをひいて、場所をおきめになりました。

私たちは、すぐにほりにかからうとすると、

また、先生がおつしやいました。

「ここへ、れいの四人づつのはんのじゆんに、お並びなさい。道具をあまりたくさん持ち出すと、なくしてしまひますから、ほるもの二つと、かご二つを使つて、あとはここへ出して、まとめておきなさい。」

むやみにほつてもだめです。うつかりほると、だれじなものをつきこはしてしまつたり、か

んじんなものを、見落してしまひます。だから、しづかにほつて、貝や、石ころは、一つのかごに入れ、これはへんだな、何かではなかなと思はれるものは、ほかのかごに入れなさい。貝や、石ころの方は、ひじやうに多いから、ときどきわきへ捨てます。さうです、それはそのところと、きめておきなせう。

よく、あとから捨てたものの中を、また探すやうなことが、おこりますから、捨てるのもきまりよく捨てること。ほる人と、かごのかりは、ときどきかうたいすることにしませう。さあ、お始めなさい。」

「なんにもないぞ。」

「だめだな、ここは。」

「よそへ行つてみたいな。」

「先生、ここは貝ばかりですよ。」

口々にこんなことをいふが、先生は耳にもお入れにならないで、一人で、たんねんにほつておいてになります。ほくらは、ときどき手をとめて、そこをのぞきに行つてみると、先生のかごの中には、いつのまにか、せきふらしいもの、土器らしいもの、ただのわり石のやうなものなどが、たまつてゐます。

「先生のところは、いろいろ出るらしいぞ。」

「ここらからも、出るかもしれないぞ。」

「一生けんめいやつてみようよ。」

私たちは、だんだんしんけんになつて、ほりました。

「そら、これはせきふらしいぞ。」

「さうだ、たしかにさうだ。先生のところにあるのと同じだぞ。」

「おや、これはなんだらう。針みたいだな。」

「骨で作ったものらしい。ひとつ先生にきいてみようよ。」

私がかけて行つて、先生におたづねしますと、「よく見つけたね。あとでよく見てあげますから、かごに入れて、とつておきなさい。」

と、しづかに先生がおつしやいました。

「せともののかけらみたいなのが、あるぢやないか。」

捨てる方のかごの中を見ながら、たれかがいひます。そこへ、先生がまはつておいてになりました。

「これかね。これは縄紋土器じょうもんといつて、貝づから出る土器では、一ばん古いものですよ。」

とつておきなさい。」

あつちでも、こつちでも、がいがあがり始めると、だれもかれも、ねつしんになつて、あ

こから出るのは、このとほり、打ちかいて作つたもので、つるつるみがかれてゐないから、ただのわり石のやうに見えるものもありま

す。  
第三には、土器。これは、縄紋土器といふ種類です。きみたちから見ると、なんだ、せともののかけらか、と思ふやうなものでありますが、これは、たいせつなものだから、どんな小さなかけらでも、拾つておきなさい……。さあ、もう三十分、ほつてみませう。」

もう、むだ口をきく人は、一人もありませんでした。四人が話し合つて、じふぶんけんきうしては、へんだと思ふものは、みな、かごの中に残しておきました。

ピリピリと、ふえが鳴りました。あとの三十分は、ひじやうに短かく思はれました。

せを流し、顔をまつかにして、ほつてゐます。先生のふえが鳴りました。ほり方中止。

「これで三十分ほりました。なんにも私は説明しなかつたが、きみたち自身で、だんだんいろいろなことを知つてきましたね。」

さつき、へんだなと思ふものを拾へといひましたが、どんなものがありましたか。まづ、動物の骨や、角のなどがありますね。これには、ただ、いのししや、しかなどをたべた時に捨てた骨や、角と、その骨や、角に手を加へて、何かの道具に使つたものとの二種があります。骨や、角で、道具に使つたものには、こんな針や、をのや、やじりや、もりなどがあります。次に、石で作つたものには、をのやじり、はうちやう、おもり、火を出す道具、こんなやうなものが、いろいろあります。こ

「かごには、みな、はんの番號をつけなさい。さうして、この一りん車に積みなさい。それから、道具を集めて、めいめいが持つて来たものがあるか、おしらべなさい。いづれ學校へかへつてから、ゆつくりしらべて、つまらないものは捨て、いいものだけのてらん會をしませう。」

どての上でべんたうをたべて、それから、かへりのみちみち、かはるがはる一りん車をおして歩きました。今日のゆくわいだつたこと……。今までの遠足などでは、味はへないことでした。家にかへつてからも、なんとなく、おほむかしの人たちや、自分たちの先祖にあたる人たちのくらしも想像されるし、おほむかしの海や、山のすがたも、思ひやられるのでした。



## 七 音といふもの

このあひだ、きねやさんから、「劇場音楽の話」を聞いた。

それは、たいこのたたき方によつて、いろいろな心持をあらはすことができるし、また、さまざまな情景をうつしだすこともできる、といふのであつた。

その一つの例として、水の音をとりあつかつてみせてくれた。水の音をたいこであらはすといふことなどは、ちよつと考へられぬが、じつさいに聞いてみると、なるほど、水の音にちがひない。

はじめに、川の水の音を、たたいてみせてくれた。川波が、さわさわと、たちさはぐところである。次には、雨の降るところを、たたいて

のは、雪の降つて來るところを、あらはした時であつた。たいこを、ひくく、こまかに、つづけて、うち鳴らすのであるが、そのいんにこもつたひびきは、いかにも、雪がしんと降りしきつてゐる情景を示してゐた。あたりが、雪の光で明かるくなるやうな感じさへしてきた。

たたくたいこは、ただ一つなのに、その打ち方によつて、水の音にもなり、風のひびきにもなり、雪の降る光景にもなるところに、音といふもののふしぎさが、こもつてゐる。

ゆめを見てゐた人が、にはかに目をさますばめんを演ずることがある。こんな時にも、たいこを使ふ。ゆめがさめる時などには、音などは、けつして起るわけのものではないが、やはりたいこをたたく。

してみると、音といふものは、ただ、情景を

みせてくれた。それから、水の中にどぶんととびこんだ時の音も、あらはしてくれた。おしまひに、海岸で波のくだけるところを、聞かせてくれた。どどん、どどんとうち寄せる波のひびきは、大だいこにふさはしいものであつた。

いま一つの例として、風の音をやつてくれた。風の音といへば、「さらさら」とか、「そよそよ」とか、「ざわざわ」とか、「びゅうびゅう」とかいふことばであらはしてゐるが、それをたいこであらはすといふのだから、おもしろい。

よく聞いてゐると、たしかに風の音になる。とうげ道にさしかかつた時、さつと吹いて來る風であり、竹やぶを流れて來る風であり、町の通りを、電線を、旗を、せんたく物を吹いて來る風である。

風の音よりも、もつと、おもしろいと思つた

あらはすことができるばかりではなく、目に見えない心持まで、あらはすことができるらしい。日本の音楽でも、西洋の音楽でも、すぐれたものほど、人間の高い心持を、あらはしてゐることがうなづける。

音楽を聞いて、それが少しもわからないといふことは、その高さを受け入れるだけの心持が、こちらにないといふことにもなるだらう。聞く人の心が、高ければ高いほど、その音楽のねうちが、生きてくるわけになるともいへよう。

## 八 一びきのくも

一びきのくもがあました。

黄色と黒のしまもやうのついた、大きなくもでした。からだかふとつてゐる上に、足も長く、見たところなかなか強さうでした。このく

もが歩いてゐると、ありや、はへたちは、きみが悪いので、どこかへ逃げてしまひます。

ある日の夕方のことでした。

くもは、木と木の間に、すをかけ始めました。細い糸を出しては、じゅんじゅんにすをかけ、やがて、きれいにこしらへあげました。

「さあ、今晚は、おいしいものがかかるかな。この二三日といふものは、てんで、ゑさがからなかつたので、すつかり、おなががすいてしまつたわい。」

それもそのはず、四五日前から、大風が吹いてゐました。それに、雨も降つてゐましたので、あみをこしらへるわけにはいきませんでした。風のとぎれを待つて、あみをこしらへましたが、すぐ破れてしまひました。それにお天氣がわるいので、虫たちは、一びきも飛んでは來ません

行つてしまひました。おまけに、あみには、大きなあなをあけました。

「しまつたことをした。」

ぶつぶつ、ひとりごとをいひながら、くもは、破れたところを、つくろひました。こんどこそは逃さないぞ、くもは、足をふんばつて、身がまへをしました。空の星は、だんだんきれいに光つてきました。あかちやんのなき聲は、いつのまにかしなくなつてゐました。

風が、思ひ出したやうに吹いて來るので、あみがゆれました。くもも、それといつしよに、ぶらぶらとゆれました。

ぶんぶんぶーん、ぶんぶんぶーん。

羽音がしました。それがみつばちであることは、くもにはすぐわかりました。

ぶんぶんぶーん。

でした。

「今晚は、どうしてもごちそうをたべなくちや、うゑ死してしまひさうだ。」

くもは、あみのまん中どころに坐り、きれいにできあがつたあみを見ながら、休みました。星が光りだしました。どこかで、あかちやんのなき聲がしてゐます。おかあさんの子もり歌も聞えて來ます。くもは、子もり歌を耳にしなから、ぼんやりと、光る星を見あげてゐました。その時、あみがにはかにゆれました。くもは、きつとなつて、その方を見つめました。あぶが、足をひつかけて、ぶんぶんいつてゐるところです。

「よしきた。うまいものがとれたぞ。」

くもが、いきなりとびかかつて行くと、あぶは、力いづばいはばたきをして、すいと逃げて

羽音がだんだん近づいて來ます。

「あれが、うまくひつかかるといいな。」

くもが、じいつと息をこらして、待つてゐると、みつばちは、くものあみを知らないで、まっすぐに飛んで來ました。

ぶぶぶぶ……

「そら、ひつかかつた。」

くもは、しめたと、元氣よくみつばちにとびかかりました。みつばちは、起きなほつて、くもに向かひました。くもは、ふといつなをとり出して、みつばちのからだを、しぼりつけようとしてました。

みつばちは、そのつなをさけて、逃げようとしてましたが、どうしても、手足にからまつて、うまく動くことができません。

そのうちに、みつばちのからだは、ぐるぐる

と、くものつなに巻かれました。ぐづぐづして  
あると、そのままたべられさうなので、みつば  
ちは、だいたい針をとり出し、くものすきをね  
らつて、胸のあたりをちくりとつきさしました。  
これには、さすがの大きなくもも、びつくり  
ぎやうてん。

「あいた、あいた、たたた……。」

くもが、胸のあたりを、さすつてゐる間に、  
みつばちは、つなをほどいて、あみを食ひきつ  
て、さつと逃げて行つてしまひました。

みつばちが、いろいろと飛んで逃げて行く後  
すがたを見ながらも、くもは、痛くてどうする  
こともできません。それより自分のからだだが、  
はれて痛むし、苦しいし、どうにもなりません。  
くもは、しばらく目をつぶつて、しづかにして  
ゐると、ばたばたばたといふ羽音が聞えてきま

した。

「あ、かうもりだな。」

思はずそちらを見ると、かうもりは、へうき  
んなかつかうをして、こちらに飛んで來ます。  
これはたいへん、あみにつきあたつてはいけな  
いと、くもが思つたとたんに、ぱさりと、かう  
もりの羽にたたかれました。あみはすつかり破  
れ、くもは、そのままちめん落ちてしまひま  
した。

「あ、びつくりした。」

くもが氣がついてみると、あたりにいいにほ  
ひがただよつてゐました。まつ白なばらが、た  
くさんさいてゐたのです。風のない夜ですが、  
そこらが、ほつと明かるくなるやうな、まつ白  
なばらの花でした。いいにほひをかいでゐると、  
今まで苦しかつたからだの痛みも、すつかりき

「くもさん、あんないいお月さん、見えない  
の。」

「なんだと、お月さんだつて。」

くもは、首をのばして、上の方を見あげまし  
た。東の空が、うすべに色に明かるくなつてゐ  
ました。今のほりかけたばかりのお月さんが、  
こちらを向いて、明かるく光つてゐました。

「くもさん、あのお月さんのところへ、行つて  
みたいと思ひませんか。」

「……。」

「わたし、一どていいから、お月さんのところ  
へ行きたいわ。」

「お月さんのところだつて。」

「おかあさんを探して來るのです。」

「おかあさん……。」

このことを聞いて、くもははつとしました。

えていきました。はれあがつてゐた胸のあたり  
も、なほつてきました。すぐ目の前のばらの花  
が、ひとりて動いてゐます。くもは、ふしぎに  
思つて、よく見るとそれは、白いてふてふてし  
た。

「なんだ、てふてふか。ちやうどいいや、うま  
いごちそうだ。」

くもは長い手をのばして、わけなく白いてふ  
てふをとらへました。くもが、大きな口をして、  
たべようとした時、てふてふは、

「くもさん、くもさん、ちよつと待つてくださ  
いと頼みました。」

かう呼びかけられると、だまつてたべてしま  
ふわけにもいきません。

「なんだい、何か用かね。」

「おかあさん」といふことばを、くもは、もう長いこと、耳にしたことはありません。また、口にしたこともありませんでした。

今、てふてふに「おかあさん」といはれて、急になつかしくなりました。くもの小さな時のことが、ゆめでもみるやうに、思ひ出されてきたのです。

「この自分にも、たしかに、おかあさんがゐた。おかあさん、おかあさん。」

「今、どこへ行つてゐるんだらう。」

そんなことを考へると、いよいよこひしくなつてきました。あひたくなつてきました。

「さうか。てふてふさん、おかあさんを探しに行きたいのか。」

「……。」

「なんだか、わしも、おかあさんを見たくなつ

ださい。」

「わかつた、わかつた。さあ、早く飛んで行くがいいよ。」

てふてふは、うれしさうに、羽をととのへました。

「ちやあ、くもさん、さやうなら。」

てふてふは、白い羽をひろげたかと思ふと、ひらりひらりとまひあがりました。それは、まつ白なばらの花が、ちうを飛んで行くやうにみえました。くもは、飛んで行くてふてふを見送りながら、

「てふてふさんは、羽があるからいいな。」と、ひとりごとをいひました。

くもは、おなかがすいてゐることに気がつきました。そこで、木と木の間に、あみをかけようと考へました。くもはそのそと歩きました。

てきたよ。」

「くもさん、今夜は、助けておくれよ。」

「ああ、いいとも。」

くもは、てふてふをはなしてやりました。

「ありがたう、くもさん。」

「あなたが、この四五日なんにもたべないことを、ちやんと知つてゐます。今しがた、みつばちにさされて、苦しんだことも、知つてゐますよ。だから、わたしをたべてもいいと思つてゐるのだけど……。」

「いや、もう、おまへさんをたべやしないよ。」

「でも、わたし、おかあさんにひと目あつたら、わたしまう、いのちはをしいと思ひません。いつてもあなたにさしあげます。」

「……。」

「それまで、しばらくいのちを助けておいてく

けれども、なんだか氣がすすみません。それで、そのまま手足をちぢめて、じつと坐つてゐました。

あたりには、やはり、ばらの花のにほひがひろがつてゐました。くもは、うつらうつらと眠くなつてきました。

「今夜は、ばらのかげで眠るとしようかな。」

くもは、からだを小さくまるめて、ころつと横になりました。まるで豆つぶのやうにみえました。

目をつむると、だれかが、くもの頭をなでてゐます。上を見ると、笑つてゐるではありませんか。くもが、ふしぎな顔をしながら、しげしげと見あげますと、

「そんなに、わたしの顔ばかり見なくてもいいぢやないの。」

「……」

「まあ、おまへは、わたしを忘れたのかい。」

「……」

「わたしは、おまへのおかあさんぢやないかね。」

おかあさんと聞いて、くもは、手をうんとのばして、とりすがらうとしました。そのひやうしに、目がさめてしまひました。くもは、ゆめをみてゐたのです。なんと短かいゆめでしたらう。でも、いいゆめでした。くもは、今みたばかりのゆめを、なんどもなんども思ひ返ししました。

お月さんは、ずつとのぼつて、白つばい光になつて、頭のましままで來てゐました。夜露が、木の葉にたまりました。たまつた露が、しづくになつて、ぼたりぼたりと落ちてきました。く

持が、しだいに變つていきました。てふてふにしても、ばらの花にしても、なんと、しづかなくらしを、してゐるのだらう。なんと、おだやかなくらしを、してゐるのだらう。

それにくらべてみて、この自分は、なんと、あらつばいくらしを、してゐることだらう。木と木の間にあみをはり、かくれてゐて、ほかの虫のひつかかるのを、待つてゐるなんて。さうして、ひつかかるといきなりとびついて、かみ殺すなんて、なんと、ひどいことをしてきたものだらう。

逃げようとするものを、つなで巻きつけて、生き血をすつて殺してしまふなんて……。てふてふは、花から花へ飛びうつり、みつをもらつて生きていく。花は花で、土の中から水をもらひ、お日さまから光をいただいて、生きていく。

もは、目がさえて、なかなか眠むることができませんでした。

「くもさん、くもさん。どうして眠らないの。やさしくかういひかけたのは、あたまのところにさいてゐるばらの花でした。」

「もう、夜ふけてすよ。おやすみなさいな。」

「……」

くもは、なんといつて返事をしていいかわかりません。そのままだまつてゐました。

くもは、たまたま、かうもりのために、高いところから、たたき落されて、地べたにころがつてゐたばかりに、てふてふとあふことができました。さうして、いいゆめをみることもできました。今また、ばらの花から、やさしいことばを、聞くこともできました。くもは、これらのことを、一つ一つ思ひ出してゐるうちに、氣

みるからに、美しいくらし方である。

くもは、そつと自分の手と足をのばしてみました。ふしくれだつた手、とがつた足、うすきみのわるい形、今までに、この手で、この足で、何百のいのちをとつたことであらう。この口で、このくちびるで……。くもは、自分ながら自分のからだを、そら恐しく思はれてきました。

白ばらの花は、もう話しかけなくなりまして。すつかり眠つてしまつたのでせう。

くもが、お月さんの光に、ちらりと光りながら落ちてくる夜露を見てゐると、ふつと風が吹いてきました。

風と思つたのは、さうではなくて、つばめが、すいと飛んで來たのでした。くもは、このつばめに拾はれてゐました。くもは、つばめのくちばしにはさまれたまま、空へつれられて行きま

した。くもは、カいつばいもがけば、あるひは、つばめのくちばしから、ころげ落ちることができたかもしれない。が、べつに逃げ出さうともしませんでした

つばめは、麥ばたけの上を飛びました。

湖の岸べを飛びました。

深い森のそばを飛びました。

やがて、夜が明けるのでせう。東の空が、ほんのりと白みかけてきました。くもは、つばめにくはへられながら、はげしい風をあびてみました。

「わたしのいのちは、つばめさんにあげよう。」  
かう決心してしまふと、くもは、すっかり楽な氣持になりました。今の今まで、みにくいと思つてゐた自分のからだも、ちつともみにくいものとは思へなくなりました。

「お月さんのところへ飛んで行つた、あの白いてふてふさんは、どうしただらう。うまくおあさんにあへたかしら。」  
そんなことを、くもは思ひました。

昭和二十一年十月二十五日 翻刻印刷  
昭和二十一年十一月五日 翻刻發行  
(昭和二十一年十月二十五日文部省検査済)

初等科國語四 第四學年後期用

定價壹圓貳拾錢

著作權所有 著者兼 發行者 文 部 省

Approved by Ministry of Education (Date Oct 25 1946)

東京都王子區堀船町一丁目八五七番地  
翻刻發行 兼印刷者 東京書籍株式會社  
代表者 井上源之丞  
印刷所 東京書籍株式會社

發行所 東京都王子區堀船町一丁目八五七番地  
東京書籍株式會社

初四 芒川 木道子